

仏教々義の原型に関する試問

藤 原 了 然

(一)

浄土宗義に限らず、各宗各派の宗義や教説についても同じように謂われうることであるが、これら諸多の宗義や教説が、同じく仏教の名を冠せられ、しかも、これらの諸教説が、口を揃えて釈尊教説の嫡子嫡流を高擡してやまない——実はこのことの強調が今日までの宗学的諸努力の中心課題であつたのであるが——ということについて、批判的立場というか客観的見地から眺めると、そこに試問なきを得ないものが認められるであろう。

不共とか独途とかということが、各宗各派の教説に於て力説されるのは至極尤なことである。しかし、周知の如くバラエティーに富んだ各宗各派の諸教説のすべてを自己の嫡子嫡流として内包する——各宗各派の教説が誤でない限りそうでなければならぬが——仏教とは、どんなものであるうか。

この問題に関する解答は、まちまちである。出世本懐論という通則に立つて、自宗教義の正系性を説くことは最も多く行われて来た仏教的又は宗学的努力であるが、その立論が経証主義に眼目を置かなければならないとする従来の仏教的常途は、学究の方法として、経証を求めて、

諸経論に表現的根拠（類似型）を見出すことが肝要視されるという傾向の顕著さを加えるに到つたのである。従つて、従来の研鑽学究の方向は、今日では異なる思想系統に属するとされている経論に於ても、その表現的な類似が認められるならば、躊躇なくこれを依拠するといふ態度がとられたものである。勿論、すべての経論を、仏金口に出ずるものとする見解よりすることによつて——その量の多さによつて——それが一代仏教の肝要であり帰結であるかの如く考えたり、見せかけたりすることは、必ずしも当を得たものとはいえないであらう。それは、非系統的とか、非学問的とかいう譏りを免れえないものと考えられる。

(二)

尤大無比の量と質とを有する仏教經典が存在する以上、仏教の原型、現存の各宗各派教義の根本形態と考えられるものを、これらの経論の中に求めようとすることは、どう考えて見ても正しいことである。但し、伝統、相承、相伝ということが立論や攻究の中心であつた時代、思想的考察とか教理史的研究が殆んど試みられなかつた時代に於ける過去の研究は、方法的な不備のあつたことも否定されないところであらう。

然しながら、ヨーロッパ的学問研究法が仏教研究に採用されはじめて、従来の仏教々学は諸方面に於て新生面の開拓が行われ、時にはその宗派の教義や信条を根底からゆさぶるといふような結果をも招来したのである。浄土三部経の神話説の如きはその尤たるものであらう。然し、好むと好まざるに拘らず認めざるを得なくなつたことは、各宗各派の現存の教義や信条なるも

のは、釈尊の仏教創説以来幾多の推移と変遷、そして発達と展開とを重ねて来たものであるというものである。従つて、現存の教義や信条は釈尊自説のそのままのものではなくして、時には釈尊教説の面影を認めがたいほどの転化をしていることが決して稀ではないということになる。

このような事実が、仏教の歴史的研究の成果として動かすことが出来ないものとされるに到ると、伝統的な各宗各派の教学は、その一枚看板である、一味瀉瓶とか一器の水を一器に移すが如くとかという表現の解釈に苦しまざるを得ないことになる。この苦悩の解決対策として、各宗各派が殆んど撥を一にして——特にいわゆる大乘教にその傾向が強いのであるが——精神的とか実質的立場に於て、自宗自派の教義や信条が最もよく釈尊教説を伝承しているということの力説につとめることになつたようである。このことは、教学的には正しいことであり、又そうするより外に途はなかつたともいえる。

(三)

しかしながら、これらの努力の数々にも拘らず、釈尊教説の生の相、釈尊精神の原型的表現ということについては、余り多くの解明があつたとは考えられない。すなわち、これらの努力の多くは、釈尊教説が自宗自派の真理性を左証する教理的根拠であることの論究ということの主題がおかれるものであつて、いわゆる学問的立場から、釈尊教説はかくかくのものであつて、その必然の展開相として今日の教義や信条が流露したという方面の論明に於て尙を充分でないものがあるといえるのではなからうか。もちろん、信仰的立場に於て、釈尊の成等正覚の内容

が、阿耨多羅三藐三菩提であるとする根本鉄則がある以上、論理的透徹というところのみを追究することは必ずしも当を得たものとはいえない一面も存するのである。

原始仏教又は根本仏教の研究の成果は、従来は小乗經典の代表と貶されていた阿含經典に対して、新しい脚光を浴びさせるようになり、今日では阿含經典を黙殺しようとするような見解は許されなくなっている。いなむしろ阿含經典、ニカーヤ等を最もよく釈尊の直接の口説に近いものとするのが常説となつていようである。こうなると、色々の論議はあるであろうが、従来の教判論というものは、少くとも新しい説明と解釈が必要となるのではあるまいか。又、阿含經典やニカーヤの研究の結果として、根本仏教の綱格なるものは、四諦、十二因縁、八正道とするのが定説的なものとされていふ今日、従来の如く四諦、十二因縁を声聞や縁覺の行とする如き理解にも大きな訂正が要請される。更に、シナ、日本に於て、新しい実践的教説の提唱される場合、殆んど例外なしにその思想的底流となつてゐる末法思想という如きものについても論考を必要とするとはいうまでもない。

現代の仏教学界における、このような課題は決して、二、三に止るものではないのであるが、それにして、未だ不充分とはいへ、今日まで進歩した根本仏教の研究成果というものが、どの程度に、各宗各派の教義や信条に影響を与えとか、又採用されているかということになると、正直なところその見るべきものは甚だ少いといわなければならないのではなからうか。このことは、各宗各派が不動の絶対真理性を具えていることの証明と解さるべきか、根本仏教の全容が未だ完全に開顯されていないためであると解すべきか、その解答は尙を後日に譲らるべき実状といわるべきであらう。

(四)

想ここに到れば、根本仏教の全容の厳正な把握ということは刻下の急務と称していいはずである。しかし、冷煖自知といわれる釈尊の自内証は、体験的なものであり身証自覚の世界である限り、その如何に善美をつくした表現が許されたとしても、釈尊自内証とその表現との間には、実物と写真との關係の如き差違を脱することは許されえないであろう。他面に於て最も肝要視さるべきことは、現行の教義や信条の身説行修ということであろう。訓計注釈ということとは極めて肝要であることはいうまでもない。然し、訓計注釈に終始することは安易に墮する譏を招くと共に、多くの危険をさえ孕む。それは動くものを静止の相に於て捉らえようとする過ちに通ずるものがある。

印度に於ける釈尊教説祖述者としては龍樹に指を屈せられるとするのは学界の定説といつていいのであろうが、この龍樹教学に再現した釈尊精神が、シナに於ける各宗祖師によつて領受開顯されたところに、今日の各宗教義の礎石の設定を見ると解するのも亦た衆見の一致するところであろう。この大勢の省察に通りなしとするところに各宗教義はその存立の根柢をもつといわなければならないが、仏教々義の原型なるものについての検討は学問的に多くの未解決の問題を残しているようである。敢え新進学徒の精進を望まずにはいられない。